第1634回（2月28日）

温州みかん高品質生産の動向

香 月 敏 孝・高 橋 克 也

最近における温州みかんの生産・消費の特徴のうち，高品質生産に焦点を当てて，その動向を整理することで，温州みかん生産の現段階的性格を明らかにし，あわせて今後の展開方向について考察した。

まず，果樹全体の生産・消費の動向を分析する中で，温州みかんの商品的特徴を把握し，その変化を跡づけた。昭和40年代から50年代前半にかけ温州みかんの果樹平均に対する相対価格は，低下傾向にあったが，50年代後半から上昇傾向に転じている。また，温州みかんの果樹全体に対する供給シェアは昭和50年前後の40％台から，平成期の20％台まで低下している。これらのことから，かつて低価格・大量消費型の代表品目（大衆果実）と位置づけられていた温州みかんも，消費量が減少する中で，果樹全体の動向がそうであったように，差別化，高品質化生産を模索する動きが顕在化しつつある点を見て取ることができる。

次に，こうした温州みかんの高品質化生産を担っている主要な産地の実態に沿って，その取組みの実態を整理した。

高品質生産の取組み方向は，高糖度みかん生産を基本に，次に適正範囲に酸度を抑えるといった食味評価基準に基づく生産に傾斜している。そして，こうした高品質生産の取組みは産地の生産段階では，①品種の選定，②栽培方法，③園地指定（園地段階での糖度検査）といった各レベルでの取組みが有機的に組み合わされて行われており，同じく集出荷場段階では①糖度等内容検査，②外観検査（階級・等級），さらに出荷・流通段階では①市場選定，②ブランド化，といった側面を持っている。

まずもって，高品質みかん生産に向けた取組みは，これらの総体としての産地活動ととらえる必要があるが，これらの活動のうち，生産段階では品種選定，栽培方法，集出荷場段階では糖度検査に主たる焦点を当てて，高品質化生産に向けた産地活動を具体的に捉えることとした。

品種の選定導入をめぐっては，普通温州の高糖系「青島」，早生・極早生系統の「山川」，「原口」，「岩崎」等の事例を挙げ，いずれも近年糖度を中心とする食味が優良であると認められた場合には，産地の組織的対応と相まってその普及が早いが，合わせてその後継品種を模索する動きも活発化している点を指摘した。

栽培方法については，長崎県におけるマルチ栽培，和歌山県における完熟栽培等の事例を挙げ検討し，長崎のマルチ栽培は県産みかんの市場評価を著しく高めるという効果があり，和歌山の完熟栽培は県統一ブランド化推進へと繋がる取組みとなった点を明らかにした。

糖度等内容検査の取組みについては，生産者へのプール精算の基礎となっている評価基準（スコア基準）の中で，内容検査がどう位置づけられているかを中心に検討した。その結果，近年，内容評価による加減点の幅が拡大するとともに，その他の評価基準（外観等）との組み合わせが精緻化している実態が明らかとなった。したがってこの面でも高品質生産をめぐって，組織的な活動が強化されていることが明らかとなった。

以上の検討から，温州みかんの高品質生産をめぐって，その取組みはトータルシステムとしての産地機能が求められていることが示唆された。また，内部品質の非破壊自動選別機の導入が展望され，この面での新たな産地対応が求められていることが想定される。